

父が 95 歳で亡くなって、もう 30 年にもなる。父は、復員(=戦地から帰国)後時々戦争の思い出話を懐かしげにしていた。

シンガポールという遠い国での思い出がつい昨日のように鮮明によみがえるのであろう。それは、決して楽しい思い出であろう筈でなく、厳しくも苦しい体験の連続であったに違いない。それだけに脳裏にくっきりと焼き付いていつまでも鮮やかな像を映し出せるのだろう。

幸いにして、父は軍属^{※1}で前線部隊のように敵と砲火を交えることはなかった。しかし、赤道直下の大地が今にも燃えだしそうな灼熱の大自然の力の前に、マラリヤに罹り何も施すすべもなく、口ウソクの火の消えいる如くに死んでいった戦友を一体どんな気持ちで眺めていただろうか。

「今に自分も同じ運命を辿る」との思考を超越し、ただ無念さの心情が高まっていったであろう。しかし、そこには「戦争とはそういうものだ」「国家を守るためには、戦争を勝ち抜かねばならない。」という感情も同時に湧き上がっていただろう。

富国強兵という戦争思想教育の徹底は、兵の一人一人の完全な血と肉となっており、私の父もその一人であった。私の弟が自衛隊に入隊したことを、父は大変喜んでいて。軍属とはいえ、外地に出征した兵役経験者として「国を守る」という思想が、尚薄れなかった証左(=証拠)ではなかろうかと思う。

私は、決して戦争賞賛者ではない。二度と再びあの悲惨な状態は避けなければならない。幸いにして、第二次世界大戦という尊い多くの生命の犠牲の上に戦後 81 年もの長さに至って平和な暮らしを享受している。

父は、昭和 18 年(17 年だったかもしれない。)に 43 歳で召集令状を受けた。私の 6 歳の時である。父は、朝早くに出征した。朝寝坊の私は、未だ寢床にいた。母が揺り起こしたそうであるが、起きる気配が全くない。父は、私の寝顔を見ながら「無理に起こすのは可哀そうや」といい、母はやむなく国鉄池田駅(現 JR 川西池田駅)まで見送った。

当時の戦争状況は、我が国に利あらずで、出征は「今生の別れ」ともなるやもしれないその出征日に、わが子を見送りたいと思う親の気持ちほど強いものはなかろう。だが父は、「無理に起こすな。かわいそうや。」という一言でその気持ちを振り切った。父の鑑のような意志と自己に厳しい心底を思う時、父の子を想う真の父性愛を垣間見た気がする。

時代背景が異なるとはいえ、平和な今を生きる私にとって、戦時の中で親の極限の覚悟を自分自身ができるであろうか…と自問する。

※1 軍属…軍人ではなく、陸海軍に所属し、事務や技術、雑務などにあたる人